

大土御祖神社境内遺跡発掘調査報告

～伊勢市楠部町～

2018（平成30）年11月

三重県埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は三重県伊勢市楠部町に所在する大土御祖神社境内遺跡の工事立会による埋蔵文化財調査報告書である。
2. 工事立会は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から依頼を受けて実施した。
3. 工事立会の体制等は次の通りである。

立会担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 和澄さやか
整理担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 和澄さやか・穂積裕昌
立会期間 平成24年4月5日
立会面積 大土御祖神社境内遺跡 18㎡
4. 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究1課が担当し、本書の編集は和澄が行った。また、本書の執筆は、Ⅱ-2を穂積が行った以外は、和澄が行った。
5. 当地は平面座標系第Ⅵ系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。
なお、座標値は世界測地系2000に基づいて表示している。
6. 遺跡位置図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2006三重県共有デジタル地図（数値地形図2500(道路線1000)）」を使用し、調整したものである。（承認番号：平成30年4月5日付三総合地第1号）
7. 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（21版）』による。当発掘調査の記録は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1:50,000地形図「伊勢」「明野」「二見」「鳥羽」、県共有デジタル地図（平成23年測図）等を基にしている。
2. 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器（1：4、1：10） 錢貨（1：2）
3. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・実測番号は当センター所蔵の遺物実測図番号である。
 - ・色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版、2003年第23版）による。
 - ・土器の残存率は口縁部を12分割して示す。口縁部が残存していないものについては底部等の残存率を示した。また、1/12以下のものは「小片」等としている。
 - ・計測値は完存もしくは復元の値であり、口径・底径は実測時の接地面で計測した値とした。
4. 遺物写真図版の番号は、遺物実測図の番号と対応している。遺物の写真図版は縮尺不同である。

目 次

I 前 言	1
1 調査に至る経過	
2 文化財保護法に関する諸手続	
3 調査の方法	
II 位置と環境	3
1 位置と地形	
2 歴史的環境	
3 大土御祖神社について	
III 遺 構	6
1 地形と基本層序	
2 遺構	
IV 遺 物	6
V 結 語	7

挿図目次

第1図 事業地内調査区位置図	2	第4図 出土遺物実測図(1)	7
第2図 遺跡位置図	5	第5図 出土遺物実測図(2)	8
第3図 立会箇所③平面図・断面図	6		

表目次

第1表 出土遺物観察表	9
-------------	---

挿図写真目次

写真1 大土御祖神社	1	写真2 平成25年以前の五十鈴橋	1
------------	---	------------------	---

図版目次

写真図版1 立会箇所②・立会箇所③	10	写真図版3 出土遺物(2)	12
写真図版2 出土遺物(1)	11		

I 前 言

1 調査に至る経過

(1) 工事の概要

大土御祖神社境内遺跡は、伊勢市楠部町を流れる五十鈴川の自然堤防上に立地する椽楠尾神社・大土御祖神社（写真1）の境内を範囲としている。今回の調査区は、新しく取り付けられた五十鈴橋（第1図「新・五十鈴橋」）の南岸カーブ部分に相当する。五十鈴川は、伊勢市を流れる宮川水系の一級河川である。伊勢建設事務所では、五十鈴川沿岸の浸水被害防止を目的に、築堤護岸工事等の改修によって流下能力を確保し、治水安全度の向上をはかる河川改修事業を行っている。鳥羽市堅神町と松阪市宮町を結ぶ県道37号鳥羽松阪線に架かる橋のひとつである五十鈴橋は、伊勢市楠部町内を横断する五十鈴川を渡るもので、地域にとって非常に重要な橋である。五十鈴橋は大正年間の橋（第1図「旧・五十鈴橋」）から付け替えが行われ（第1図「現・五十鈴橋」・写真2）、今回の工事による橋（第1図「新・五十鈴橋」）は平成25年3月に開通した。

(2) 工事立会と調査の概要

工事箇所は大土御祖神社境内遺跡隣接地であったことから、工事中不時発見防止のため、平成24年4月5日に工事立会を実施した。立会は3か所で行い、確認した面積は合計18㎡である。



写真1 大土御祖神社

その結果、全ての立会箇所で作成土層と洪水の氾濫堆積層と考えられる灰色砂礫層を確認し、立会箇所①では近世の土師器、陶磁器、瓦が出土したほか、立会箇所③では近世の陶器甕が据え付けられた状態で確認されたため、即日、調査を実施し、記録保存の措置を講じた。

2 文化財保護法に関する諸手続き

本工事立会の結果、大土御祖神社境内遺跡の範囲は西側へ広がることが判明したことから、三重県教育委員会は伊勢市教育委員会と協議のうえ、大土御祖神社境内遺跡の範囲を変更する手続きをとった。なお、三重県教育委員会が遺跡の存在について現認していることから、文化財保護法第95条に基づく埋蔵文化財包蔵地の周知の手続きを実施している。

○文化財保護法第100条第2号

「埋蔵文化財の発見・認定について」三重県教育委員会教育長から伊勢警察署長あて通知

平成25年1月18日付 教委第12-4425号

○周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更

「周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更」三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて通知

平成30年6月25日付 教埋第106号



写真2 平成25年以前の五十鈴川橋

3 調査の方法

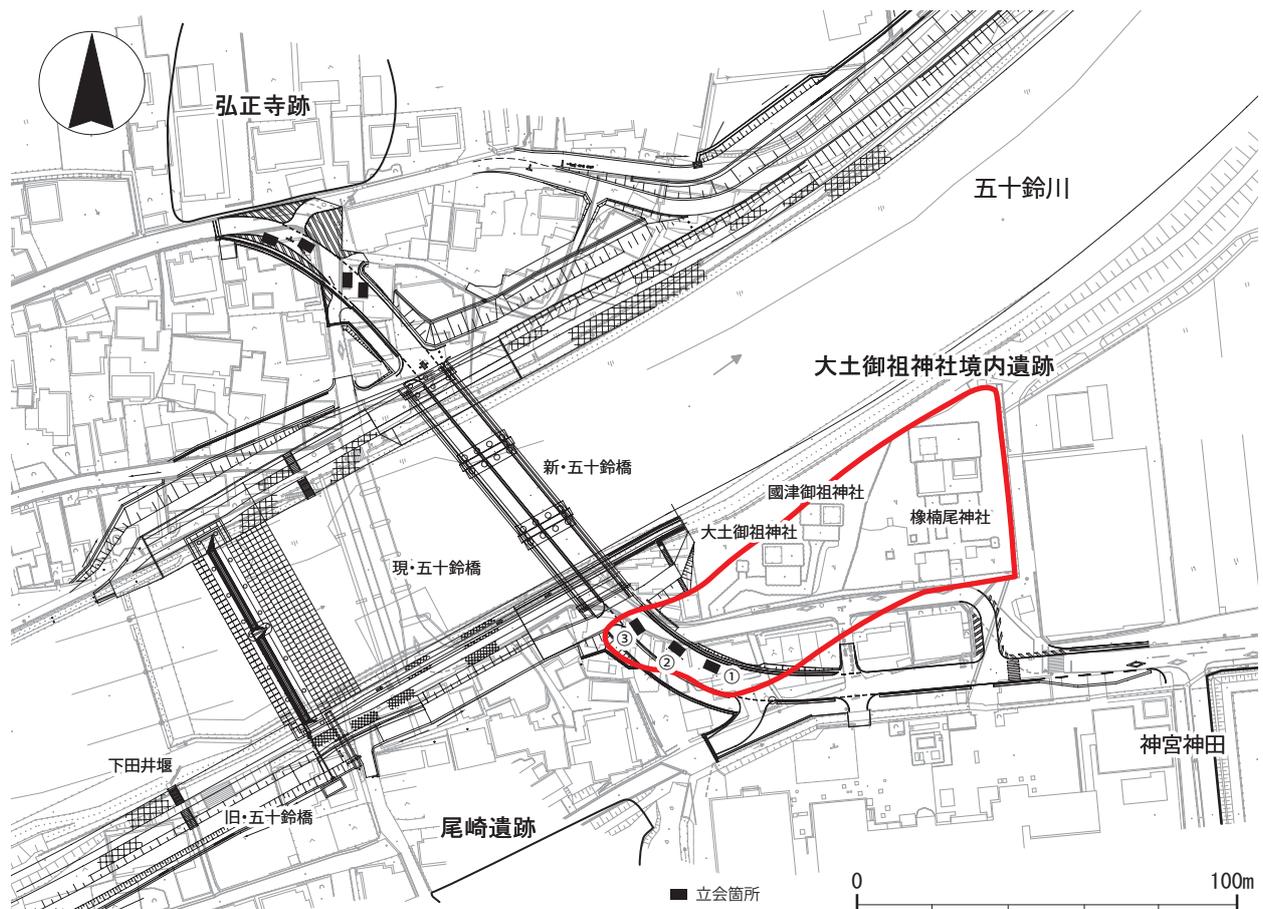
(1) 工事立会の方法

工事立会による地下状況の確認は、3か所（幅2m×3m）において実施した。重機により上層から掘削する状況を確認し、遺物が確認された場合にはこれを採集した。

また立会箇所③では遺構が確認されたことから、臨機に発掘調査を実施し、写真撮影と図化により記録を作成したうえで、遺物を取り上げた。

(2) 写真撮影

調査における写真は、コンパクトデジタルカメラで撮影した。遺物の写真は、ニコンD800Eを用いた。



第1図 事業地内調査区位置図（1：2,000）

II 位置と環境

1 位置と地形

伊勢市を流れる五十鈴川は、宮川水系の一級河川で、伊勢市の神路山を源流とする。伊勢神宮内宮(皇大神宮)境内を流れる鳥路川や、朝熊山を源流とする朝熊川と合流したのち、一方は二見浦へ、もう一方は瀬田川へ合流して大湊を通り伊勢湾へ注ぐ。内宮へと渡る宇治橋が架かり、川面で口や手を清める御手洗場があるなど、伊勢神宮のなかでも重要な川のひとつである。倭姫命が裳裾を洗い濯いだという伝説から御裳濯川ともいわれ、水で「すすぐ」という言葉が名称の由来であるという説もある。

大土御祖神社境内遺跡がある楠部町は、五十鈴川が瀬田川と分岐する鹿海町のやや上流に位置する。楠部町の集落は五十鈴川を挟んで南北にわかれており、右岸には神宮新田がある。神社は、五十鈴川右岸の自然堤防上に位置し、川面の標高は3.6m、右岸の標高は6.2m、左岸の標高は4.8mである。

2 歴史的環境

五十鈴川は、伊勢平野最南端を画す一級河川で、その水分の地には伊勢神宮内宮が位置する。ここでは、五十鈴川流域地域の歴史的環境について、主に2011年刊行の『伊勢市史』第6巻考古編をもとに概観していこう。

旧石器時代 大土御祖神社境内遺跡に隣接する尾崎遺跡では、チャートの剥片が採集されているほか、五十鈴川を挟んだ西南西1km(以下、方位と距離は大土御祖神社境内遺跡からの方位・距離)の桶子遺跡では旧石器時代のナイフ形石器が採集されている。定型的なナイフ形石器ではないものの、その可能性のあるナイフ形石器類似のチャート製ないしはサヌカイト製の石器が桶子遺跡に近接する宮後遺跡や枕返B遺跡などでも採集されている。海浜部に近い低地部ながら、旧石器時代の遺物が確認できることは注目してよからう。

縄文時代 確実な縄文土器は、五十鈴川を挟んだ西側1kmの蔵人湟遺跡で前期末かとみられる土器片

が、対岸の中村遺跡で晩期の突帯文土器が採集されているのみである。しかし、草創期とみられる木ノ葉形尖頭器や早期の有茎尖頭器が桶子遺跡から採集されているほか、宮後遺跡や中村遺跡など五十鈴川左岸の台地上や縁辺に立地する複数の遺跡から縄文時代とみられる多くの石器が採集されている。これらの遺跡は、残念ながら多くが宅地化のため詳細は知りえないが、五十鈴川沿いの台地・丘陵には本来的には縄文期の遺跡も多数存在していたとみられる。

弥生時代 宮後遺跡で前期の遠賀川系土器や水神平式系の土器が採集されており、それを嚙矢として五十鈴川沿いの多くの遺跡で弥生時代の土器や石器が出土している。なかでも、近鉄五十鈴川駅の南側に広がる桶子遺跡、宮後遺跡、月読宮旧域遺跡、中村遺跡などでは中期ないしは後期の土器や石器が採集されており、桶子遺跡では、突線鈕3式三～五段階のものと考えられる銅鐸片が確認されている。隣接する宮後遺跡とともに、当地の拠点的な集落であった可能性が指摘されている(岡田2011)。

古墳時代 桶子遺跡で引き続き古墳時代前期に属する土器が確認できるほか、北西1.4kmの大五輪遺跡でも東海系の高坏やS字甕など前期に遡る土器類が出土している。しかし、五十鈴川流域では前期から中期前半に属する古墳は未確認で、当地における古墳造営は中期後葉まで下る。このうち、東北東1.4kmの尾根頂部に所在した赤土山古墳群は、円筒埴輪と人物・家・馬などの形象埴輪が出土しており、かつて「浜郷村出土」として報告(穂積2005)した鹿形埴輪も、赤土山古墳群から出土した可能性が指摘されている(岡田2011)。さて、当地の後期群集墳は、五十鈴川の左岸・右岸の両方にまたがっており、円墳ないしは方墳の墳形をもち、内部主体は木棺直葬・石棺直葬・横穴式石室・横穴式木室などバラティに富む。なかでも、本地域を特徴づける埋葬形式が横穴式木室で、北東0.6kmの南山古墳と東北東3.5kmの昼河古墳群で類例がある。ただし、横穴式木室墳も含め、埴輪を伴う古墳もあるものの、墳丘はいずれも小規模で、いわゆる首長墳に相当する古墳は当地域にはなかったとみられる。

現在の内宮の地は、この時代すでに大規模な祭祀が開始されている。内宮から半径1.5km以内には現時点で古墳は存在せず、祭祀遺跡近傍での古墳造営は忌避されたとみられるが、それを超える範囲では古墳造営の規制は基本的になかったようだ。

古代～中世 上流域に伊勢神宮内宮が置かれた当地は、伊佐奈岐宮や月讀宮、朝熊神社、国津御祖神社など皇大神宮の別宮・摂末社が点在するなど歴史的に神宮との関係の強い地域で、大土御祖神社も皇大神宮摂社である。一方で平安時代中期以降、神仏習合の考えが神宮にも波及し、神宮神官層の出家や造寺、経塚造営が顕著化するに至る。本地域においても、南側0.3～0.6kmの防山遺跡、防山南遺跡は、明治元年に廃寺となった尾崎坊遍照院の坊に由来する地名で、中世後期から近世の墓が散在し、寺院跡の存在が推定される。このうち、防山南遺跡は内宮神主の荒木田氏、なかでもその一統の藤波家にかかる墓地と想定されている。明治22年に廃寺となった菩提山神宮寺は鎌倉初期の建久6（1195）年に東大寺宗徒の伊勢参宮の折に大般若経を転読奉納した神宮ゆかりの寺院で、寺域からの瓦経の出土でも著名である。大土御祖神社境内遺跡から五十鈴川を挟んで対岸に所在する弘正寺跡は、鎌倉時代前期頃に西大寺叡尊を中興とした律宗寺院で、旧伊勢国ではその筆頭に数えられる。採集資料として、ての字状土師器皿や瀬戸美濃産緑釉皿、常滑産甕など平安～室町時代以降の遺物がある。平成24年度の三重県埋蔵文化財センターによる工事立会では、15世紀代から16世紀代代の土師器類や近世陶器類が出土している。さらに、北東3.2kmの安養寺跡は、12世紀末に伊勢に滞在した西行が営んだ庵に由来する寺院とも目され、隣接して豆石山経塚も存在する。

以上のように、内宮膝下の地である本地域ではあるが、特に中世以降は神仏習合の影響のもと、寺院や墓地、経塚などの仏教関係施設が活発に営まれ、なかでも菩提山神宮寺や遍照院など伊勢神宮神官層が関与した寺院が存在することが特筆される。

3 大土御祖神社について

大土御祖神社境内遺跡は、内宮摂社の大土御祖神

社と、楠部町の氏神を祀る椽楠尾神社の境内を範囲とした遺跡である。遺跡から直線距離で2.5km上流には伊勢神宮内宮がある。『伊勢市史』によると、昭和16年頃に大土御祖神社境内遺跡から古墳時代後期から平安時代前半頃のものと考えられる須恵器甕片が採集されている。

大土御祖神社は、内宮の摂社27社のうち第10位の神社とされ、神明造の社殿が五十鈴川を背に南面している。延暦23年（804）年の『皇大神宮儀式帳』には境内の面積が、延久5年（927）の『延喜式神名帳』には度會郡五十八座の一であるという記載が残る。中世には廃絶したが、寛文三年（1663）に、大中臣精長によって旧社地が推測され、摂社として再興された。一方、神社と境内が接する椽楠尾神社は、明治3年（1870）以降合祀と分祀を繰り返し、現在の境内地には明治41年に合祀された際に移ったとされる。なお、二十年に一度行われる遷宮の記録は、延宝6年（1678）から残っている。

神社の南東には、新嘗祭で神宮に奉納する米をつくる神宮神田が隣接している。古くは全国各地にあった神宮神田も現在はここだけで、毎年5月の御田植神事をはじめとした祭事が執り行われている。この神田が当地に設けられた時期は不明だが、古くから神宮の影響が強い地域であることがうかがわれる。

[参考文献]

- ・伊藤聡2011『中世天照大神信仰の研究』法蔵館
- ・宇治山田市役所1929『宇治山田市史』上・下巻
- ・岡田登2011「遺跡概観」『伊勢市史』第6巻考古編 伊勢市
- ・佐藤虎男1941「神宮の土器」『紀元二千六百年記念肇国文化論集』
- ・式内社研究会1990『式内社調査報告』第6巻東海道1 皇學館大学出版部
- ・穂積裕昌2005「形象埴輪」『三重県史』資料編考古1 三重県
- ・三重県埋蔵文化財センター2014『平成24年度三重県埋蔵文化財年報』



第2図 遺跡位置図 (1 : 40,000) (国土地理院「伊勢」「明野」「二見」「鳥羽」)

※図示した遺跡は抜粋

III 遺 構

1 地形と基本層序

立会対象地は、五十鈴川右岸の自然堤防上に立地する。神社境内の標高は約4.8mで、五十鈴川の水面との比高差は約1mである。右岸の住宅街の標高は6.2mで、神社は周囲より一段低い位置にあることがわかる。

基本層序は、全ての立会箇所③で同一である。現代造成土の下に河川氾濫によるとみられる灰色砂礫層が40～70cm程度堆積し、拳大の礫が混じる。近世の整地土は、黄褐色砂礫層と明黄褐色土の2面を捉えることができ、いずれの上面にも瓦や土師器片が

混じる包含層が堆積していた。

2 遺構

立会箇所は3か所で、立会箇所③のみ遺構が確認できた。立会箇所③では、18世紀前半の常滑産陶器甕が2点出土し、うち1点は現地表面の156cm下で底部が据え付けられ、上半部は割れた状態でみつかった。埋甕とみられる。立会範囲の制約から土坑の掘形を認識することはできなかったが、埋甕の内部から土師器皿（13～15）と寛永通寶1枚（20）が出土した。埋没時期は遅くとも18世紀前半と考えられる。

IV 遺 物

大土御祖神社境内遺跡から出土した遺物は、コンテナケース6箱分で、うち4箱が常滑産陶器甕の破片である。遺物はいずれも近世に属する。なお、肥前産陶磁器類の時期比定は堀内秀樹氏⁽¹⁾のご教示による。

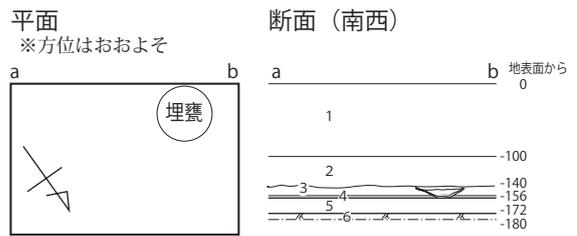
立会箇所①出土遺物（1～12） 1・2は南伊勢系土師器で、1は伊藤編年⁽²⁾の皿B形態で、口縁部に油煙痕がある。2は茶釜形である。3は瀬戸美濃産陶器で、徳利の頸部の可能性があり、時期は18世紀である。4～8は肥前産磁器で、時期はおもに18世紀後半である。7は見込みには五弁花が筆描されており、高台部内面には渦福が描かれている。9は瀬戸産陶器播鉢である。10～12は瓦である。10は巴紋の珠点が4つ残り、文様構成から時期は織豊期の可能性がある。

立会箇所③出土遺物（13～20） 13～15は南伊勢系土師器皿で、13は口縁部にヨコナデを施さないB形態、14・15は口縁部にヨコナデを施すC形態である。16は鉄泥を施された陶器の高台部で、加工円盤と考えられる。17～19は常滑産の陶器大甕、いわゆる「赤物」と呼ばれる軟質のもので、口縁部の形態から時期は18世紀前半である⁽³⁾。20は銭貨で、寛永通寶のうち、背面に「文」字がある新寛永、いわゆる文銭であることから、鑄銭時期は1668年（寛文

8）から1683年（天和3）までの16年間に鑄銭されたものである⁽⁴⁾。そのほか、地山直上の暗褐色砂質土層から、炭化物とともに南伊勢系土師器鍋もしくは焙烙の体部片が出土している。

[註]

(1) 堀内秀樹1996「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内調査研究年報1』東京大学埋蔵文化財調査室



- 1 造成土（現代）
- 2 灰色砂礫総（拳大の礫を含む）
⇒河川氾濫堆積層か
- 3 黄褐色砂質土（礫混じり）遺物多く含む
⇒近世整地土層Ⅰ
- 4 青灰色砂質土
- 5 暗褐色砂質土（炭混じり）近世土師器片含む
⇒近世整地土層Ⅱ
- 6 黄褐色土

第3図 立会箇所③平面図・土層図（1：10）

- (2) 伊藤裕偉1996「近世土師器の形態と変遷」『高河原遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- (3) 中野晴久2006「常滑窯」『江戸時代の焼き物—生産

と流通—』(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

- (4) 兵庫埋蔵銭調査会1996『日本出土銭総覧 1996年版』

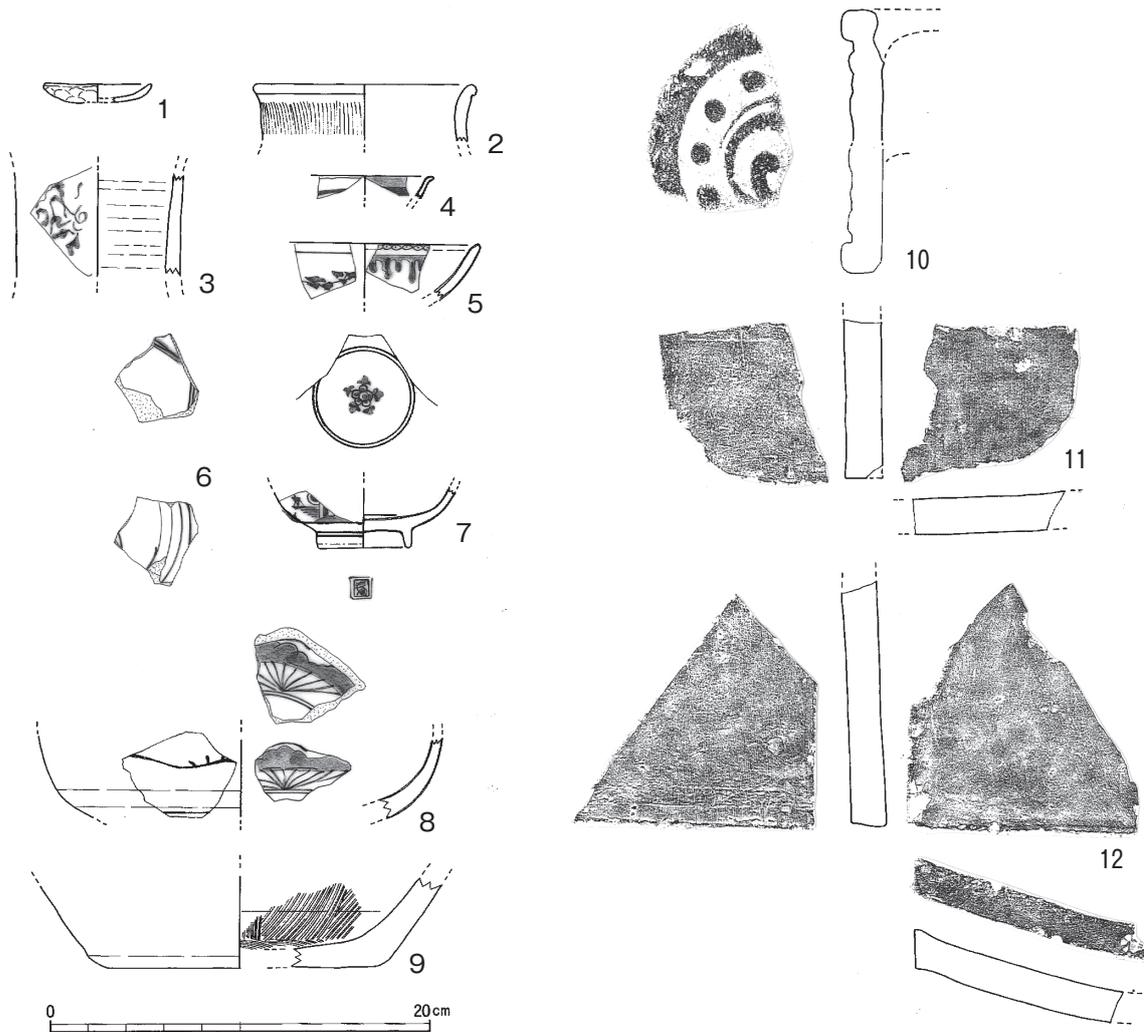
V 結 語

今回の工事立会では、大土御祖神社の創建が推測されるような資料は確認されなかったが、18世紀代を中心とした土師器・陶磁器類が出土した。

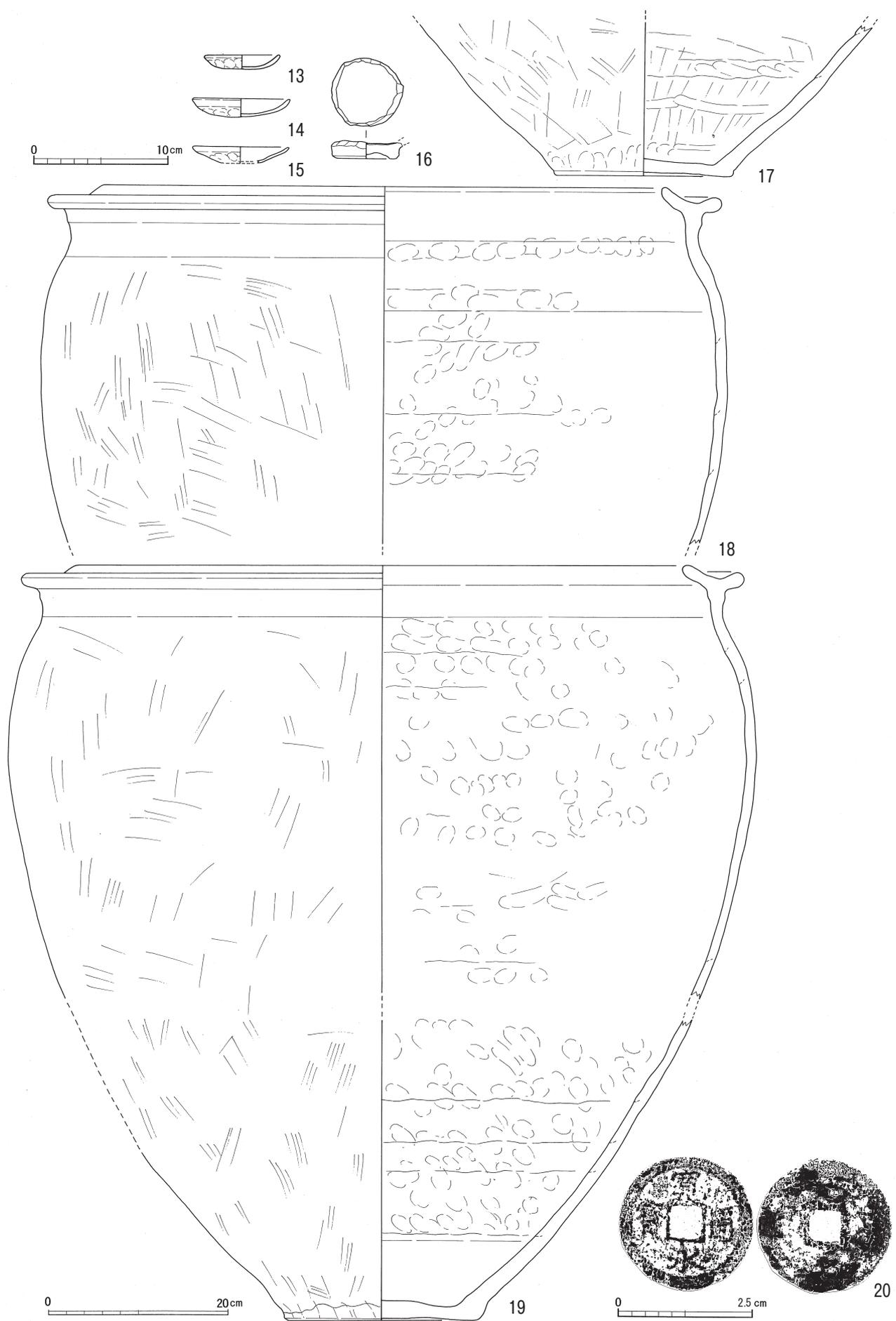
伊勢市市街地にある高河原遺跡では、17世紀後葉から18世紀前葉の近世南伊勢系土師器が大量に出土しており、陶磁器類は瀬戸美濃・肥前産が多いことが指摘されている⁽¹⁾。大土御祖神社境内遺跡の出土資料は点数が限られているため単純に高河原遺跡の傾向と比較することはできないが、肥前産が多い点は類似する。

今回みつかった埋甕は、近世墓もしくは肥溜めと考えられる。土坑の掘形を認識することはできなかったが、内部から土師器皿や寛永通寶が出土している点を勘案すれば、近世墓と捉えることができよう。

南勢地域の近世墓調査事例は、松阪市鴻ノ木遺跡⁽²⁾・玉城町岡村中近世墓⁽³⁾・伊勢市円座近世墓⁽⁴⁾・伊勢市白米家近世墓⁽⁵⁾・志摩市浄土近世墓地⁽⁶⁾・志摩市鯛浦間近世墓⁽⁷⁾等が挙げられ、三重県内では比較的調査例が多い地域である。浄土近世墓地や



第4図 出土遺物実測図(1)(1:4)



第5図 出土遺物実測図(2) (13~16; 1:4, 17~19; 1:6, 20; 1:1)

円座近世墓では寛永通寶が六文銭（六道銭）として埋納された事例が報告されている。また、常滑焼陶器大甕を埋甕として使用したと推測される例は、鴻ノ木遺跡で18世紀前半、鯛浦間近世墓で19世紀前半頃に認められる。今回確認された埋甕が近世墓であるならば、内宮の撰社にあたる社殿に隣接して墓域があったことになり、近世の伊勢市域における土地利用の一端を推測できる事例といえる。

[註]

(1) 三重県埋蔵文化財センター2015『高河原遺跡発掘調

査報告』

(2) 三重県埋蔵文化財センター1998『鴻ノ木遺跡(上層編)』

(3) 三重県埋蔵文化財センター2006『玉城丘陵の中世火葬坑群 研究紀要 第15-4号』

(4) 三重県埋蔵文化財センター2014『円座近世墓群発掘調査報告』

(5) 伊勢中世史研究会編2015『白米家墓地総合調査報告』

(6) 三重県埋蔵文化財センター2006『浄土近世墓地調査報告-近世墓地の発掘調査及び周辺文化財調査-』

(7) 三重県埋蔵文化財センター2014『鯛浦間近世墓発掘調査報告』

第1表 出土遺物観察表

報告番号	実測番号	器種・質・分類等	地点	層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	005-01	土師器 小皿	①	包含層(砂礫層)	(口径)5.6 (高さ)1.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	内外:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 4/12	油煙痕あり 南伊勢系
2	005-02	土師器 茶釜	①	包含層(砂礫層)	(口径)13.4	外:ハケメ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙5YR6/4	口縁部 3/12	南伊勢系
3	005-04	陶器 徳利?	①	包含層(砂礫層)	—	外:ロクロ・施釉 内:ロクロ・施釉	密	素地:灰白2.5Y8/2 釉:灰白5Y7/2	頸部 1/12	瀬戸美濃18c
4	006-03	磁器 皿	①	包含層(砂礫層)	—	外:染付呉須筆描→施釉 内:染付呉須筆描→施釉	密	灰白N8/1	小片	肥前18c後半
5	004-10	磁器 椀	①	包含層(砂礫層)	—	外:染付呉須筆描→施釉 内:染付呉須筆描→施釉 (一部青磁掛け)	密	白 青磁かけ	口縁部 片	肥前18c後半
6	004-07	磁器 皿	①	最下層(炭層)	(高台径)8.2	外:染付呉須筆描(圏線2)→施釉 内:染付呉須筆描(圏線3)→施釉	密	白	高台部 2/12	肥前18c代
7	004-08	磁器 椀	①	包含層(砂礫層)	(高台径)4.8	外:染付呉須筆描(圏線2)→施釉 内:染付呉須筆描(圏線2)→施釉	密	白	高台部 1/12	肥前18c後半 高台内に「満福」印
8	004-09	磁器 大皿	①	包含層(砂礫層)	—	外:染付呉須筆描→施釉 内:染付呉須筆描→施釉	密	白	体部片 1/12	肥前18c末
9	005-03	陶器 播鉢	①	包含層(砂礫層)	(底径)14.0	外:摩耗 内:ナジ目 15本/3.6cm	密	素地:淡黄2.5Y8/3 釉:暗赤灰2.5YR3/1	底部 2/12	瀬戸18c
10	005-06	瓦 軒棧瓦	①	包含層(砂礫層)	(瓦当面)約14.0	巴文・珠点	密	灰白2.5Y7/1 ~黄灰2.5Y5/1	—	珠点4個残存
11	006-01	瓦 平瓦	①	最下層(炭層)	(厚)2.0	—	密	灰白2.5Y7/1 ~黄灰2.5Y5/1	—	—
12	006-02	瓦 平瓦	①	最下層(炭層)	(厚)1.9	—	密	灰白2.5Y7/1 ~黄灰2.5Y5/1	—	スタンプ紋1点残存
13	004-01	土師器 小皿	③	埋甕内	(口径)5.5 (高さ)1.1	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	内外:灰白10YR8/2	完形	南伊勢系
14	004-03	土師器 小皿	③	黄褐色砂質土層	(口径)7.2 (高さ)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	内外:にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 9/12	南伊勢系
15	004-05	土師器 小皿	③	最下層(炭層)	(口径)7.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	内外:にぶい橙 10YR7/3	口縁部 1/12	南伊勢系
16	004-04	陶器 丸椀	③	黄褐色砂質土層	(高台径)4.9	外:削り出し高台・施釉 内:施釉	密	素地:浅黄橙10YR8/3 釉:にぶい赤褐5YR5/3 ~黒褐10YR3/1	高台部 のみ	瀬戸美濃、鉄釉。高台内面 まで施釉あり。加工円盤?
17	002	陶器 甕	③	黄褐色砂質土層	(底径)19.6	外:板ナデ 内:オサエ・ナデ、板ナデ	密	内外:橙7.5YR6/6	底部 7/12	常滑
18	003	陶器 甕	③	黄褐色砂質土層	(口径)63.0	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙5YR5/2 内:橙5YR6/6	口縁部 6/12	常滑18c前半
19	001	陶器 甕	③	黄褐色砂質土層	(口径)68.0 (高さ)85.9 (底径)20.7	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ	密	内外:橙7.5YR6/6	2/12	常滑18c前半
20	004-02	金属製品 銭	③	埋甕内	(径)2.6 (厚)0.15	—	密	—	完形	寛永通寶(文銭)

写真図版 1



立会箇所②と四郷小学校



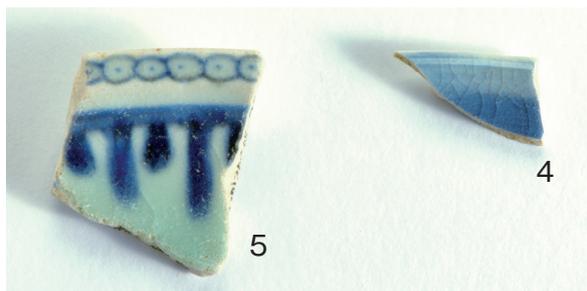
立会箇所③と大土御祖神社（南東から）



立会箇所③（南西から）



立会箇所③埋甕（南西から）



出土遺物 (1)

写真図版 3



出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおつちみおやじんじゃけいだいいせきはくつちょうさほうこく～いせしくすべちよう～							
書名	大土御祖神社境内遺跡発掘調査報告～伊勢市楠部町～							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	382							
編著者名	和澄さやか（編）、穂積裕昌							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2018(平成30)年11月2日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおつち みおやじんじゃ 大土御祖神社 けいだいいせき 境内遺跡	いせしくすべちよう 伊勢市楠部町	203a	市史313	34度 28分 15秒	136度 44分 15秒	20120405 ～ 20120405	18m ²	主要地方道 鳥羽松阪線 地方特定道 路(五十鈴橋 上部工)工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大土御祖神社 境内遺跡	集落跡	近世	土坑	土師器、陶磁器、 近世瓦、寛永通宝				
要約	伊勢神宮内宮(皇大神宮)の摂社である大土御祖神社を中心とした大土御祖神社境内遺跡において、近世の常滑産陶器甕が据えられた状態で出土した。							

三重県埋蔵文化財調査報告382

大土御祖神社境内遺跡発掘調査報告
～伊勢市楠部町～

2018（平成30）年11月2日
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 (有)ミフジ印刷
